

令和元年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 野口 和代

全園児数 29 名

1. 研究主題 にこにこ・もりもり・きらきら活動する幼児を目指して
—子どもの心を動かす遊びの工夫—

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

自ら様々な環境にかかわり、夢中になって挑戦したり、工夫したりすること、心を動かし思考錯誤し、仲間と協力するなどの体験を積み重ねることで豊かな心が育まれ、たくましく生活する幼児の育成につながると考え研究主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

様々な環境に自らかかわり、充実感や満足感を味わい、意欲的に活動する幼児を育成するために、保育者は幼児の気持ちに寄り添い、発達の過程に応じた様々な環境の工夫や援助のあり方を探っていく。

②研究の重点

- ・研究主題について、職員相互の共通理解を図る。
- ・一人一人の実態や発達段階を把握し、学年の特性に応じた指導計画や教育環境の見直しをしながら、子どもの心を動かすための環境構成の工夫と保育者の援助のあり方を探る。
- ・園と家庭・地域・小学校との連携の充実にも努め、地域の教育力を活かしながら幼児が様々な人と触れ合い、豊かな体験ができるような日々の保育内容の工夫に努める。

③活動の方法

【4歳児：5月】「あっちまで飛ばすぞー！」

<ねらい>

- ・風などに興味をもち、不思議さやおもしろさに気付く。
- ・好きな遊びや興味をもった遊びを楽しみながら、友達と関わって遊ぶ。

保育者が準備をし、子ども達と一緒に折り紙を細かく四角に切ったものを、透明のビニール袋に入れ風船のようなものをつくった。その袋をポンポンと上にたたき上げたり、友達や先生にパスをしたりしながら遊んでいた。

A児が風船を床に置くと、風で風船が動き「わ、動いた！」と驚いている。保育者は、「ほんとだね。なんで動いたんだろう？」と問いかけた。すると近くにいたB児がすかさず「風

じゃない？」と話した。保育者は風に興味をもついい機会だと考え、「なるほど！じゃあこれで風をつくったらどうなるかな」と、うちの代わりになるような厚紙や段ボールをすぐに出した。保育者が仰いで見せると、子どもたちは「おー！それいいね」と真似をしてやり始めた。しばらく遊んでいると、A児は縦長の机の端に風船を置き、「ここから端までいけるかな」と仰ぎ始め、まわりの子どもたちもA児の様子を見て真似をし、「あっちまで飛ばすぞー！」と繰り返し遊びを楽しんでいた。



<反省・評価>

- ・子どものつぶやきからすぐに環境を用意したことで、その環境を使ってさらに風の不思議さやおもしろに気付く姿につながった。
- ・子どもの疑問や考えた遊びに、保育者が反応したり共感したりすることで、まわりの子どもたちも興味をもち、友達同士で遊ぶ姿や風の性質を楽しむ姿につながった。

【5歳児：6月】 できひんけど、やってみよう

<ねらい>

- 友達の姿に刺激を受け、やってみようとする。
- 挑戦する気持ちをもち、繰り返し挑戦する。

昨年度の遊びを思い出し、マットやトランポリン、巧技台などの用具を組み合わせでサーキット遊びをしている。毎日継続して遊びに取り組むことで、次第に自分たちで準備や片付けができるようになった。

6月頃より挑戦する楽しさを味わってほしいと鉄棒や跳び箱を保育者が意図的に出すようにした。昨年の5歳児の姿を思い出し、数名の幼児が取り組みだした。失敗しても何度も挑戦し、数人の幼児が跳び箱を跳べたり逆上がりができるようになったりした。保育者は挑戦した頑張りやできるようになった嬉しさに十分寄り添い、認めるようにした。友達が出来るようになった姿に刺激を受け、「自分もやってみよう」と跳び箱や鉄棒に挑戦する幼児が増えた。



「難しい」「何回やってもできひん」「ぶつかったところが痛い」と心がくじけそうになっている幼児を見て、出来るようになった幼児が、「ぼくも最初は失敗ばかりやったよ」「頑張ったら嬉しいよ」「惜しい！あともうちょっと」「ここは足をこうしたら上手くできるよ」などとアドバイスや励ましの声を掛けるようになった。友達からの言葉に勇気づけられ、自分も出来るようになりたいと、「今日も跳び箱頑張るわ」「あともうちょっとで出来そうやねん」と、次第に根気強く何度も挑戦する姿が見られるようになった。出来るようになった時には「やった！」「めっちゃ疲れたけど嬉しい」と、喜びを友達同士や保育者と共有する姿が見られた。

<反省・評価>

- ・トランポリンや巧技台など、子どもたちに身近な運動遊具を使った遊びを存分に楽しみ、遊び慣れてきた頃を見計らって意図的に跳び箱や鉄棒を出した。子どもたちは新しく増えた運動遊具に「やってみたい」という気持ちを強く抱き、遊びに取り組んだ。
- ・数回やって諦める幼児、挑戦する前から避ける幼児もいた。しかし保育者が出来るようになった幼児の嬉しそうな様子、達成感を味わっている姿を十分に認め、他児に広めることが跳び箱や鉄棒に興味をもつきっかけとなり、友だちと関わりながら、最後まであきらめずにやり遂げようとすり姿につながった。

【5歳児：9月～】 本物のパンをつくりたい

<ねらい>

- 本物らしくつくすることにこだわり、工夫したり試したりして遊ぶ。
- 遊びのイメージをふくらませ、友だちとアイデアを出したり伝え合ったりする。

9月、夏休みの経験からバーベキュー遊びが始まった。ブロックやビールケースに金網を乗せ、落ち葉などの自然物を食べ物に見立てて遊ぶ。家庭より持ち寄った野菜くずをナイフで切り料理して遊ぶうちに「バーベキューで野菜と肉以外も焼くよな」「一緒にパンも食べたで」「釜あったらいいのに」「釜つくったらパンもピザもつくれるやん」「本物のパンつくりたいな」と、より本物らしくしたいという思いが強くなっていった。

そこで、パンやピザづくりをして遊ぶことができるよう子ども達と相談しながら、小麦粉やボウル、計量カップなどを用意した。小麦粉を見た子どもたちは「これ知ってる!」「パンって小麦粉からできてるねんで」「小麦粉あったら本物のパンつくれるな」と、早速パンづくりを始めた。つくった生地を金網に乗せて焼くが、「(金網の)隙間からだんだん落ちていっちゃう」「火も本物やったらいいのにな」「本当に焼けたら面白いのにな」と、小麦粉という本物の素材を使ったからこそ、更にこだわってつくりたいという思いが生まれた。「フライパンで焼きたい」「でも火、使うの危ないしな」「パンってオーブンとか釜に入れたら焼けるねんで」子どもたちのイメージを聞くと、焼き目のついたパンをつくりたいという思いが強いと感じた。そこでオーブントースターを用意し、つくった生地をトースターで焼くことにした。本物のパンのようにふんわりとはならないが、焼き目のついたことで小麦の香りが強くなり「いい匂いがする!」「色が変わったな」「本当に焼けた!」と喜び、トースターで焼くことを楽しみにしながらパンづくりをする。次第につくった生地を伸ばして野菜くずを乗せてピザをつくったり、型抜きでクッキーづくりをしたり、色水や自然物を混ぜて色付けをしたりと小麦を使った遊びが発展していった。



<反省・評価>

- ・子どもの「本物らしくつくりたい」という思いを実現できるよう、子どもと共に遊びのアイデアを考えたり相談したりしながら、用具や素材を用意したりしたことで遊びがより一層深まり、楽しくなった。
- ・安全面には十分気を付けながらも自分達で遊びを進め、主体的に活動できるよう見守りの援助を行ったことで、遊びの中で試したり発見したり、伝え合ったりする姿が見られるようになった。

【4歳児：2月】 氷どうなるかな

<ねらい>

- ・氷や雪などの自然現象に触れ、手で触って感じたり試したりして遊ぶ。
- ・自分の考えを話したり友達の話の聞いたりして、興味や関心を広げる。

暖冬のため氷の経験がなかったが、翌日の予想気温が低かったことから、氷の経験をするいい機会だと考え、前日に子ども達と一緒にバケツやタライ、型抜きに水を溜めておいた。

翌日、できた氷を踏んで遊び、細くなった氷を手にとると、A児が「これにサラ砂をかけてみよう」と砂場へ持って行った。A児の言葉を聞いたまわりの子どもたちも一緒についていき、砂をかける様子を一緒に見守る。容器に入れた氷に砂をかけてみると、細かい砂が氷のまわりにつき、「きな粉餅みたい」「チョコレートにも見えるで」と口々に話している。するとB児が「ここに水かけたらどうなるのかな」と話す。



(保育者はB児の疑問に対して子どもたちがどう考えるのかを知りたいと思い、「どうなると思う?」と聞く。「うーん、分からへん」と、答えが出そうになかったので、実際にやってみることにした。)

水をかけてみると、「あ、なんかついてた砂がとれた」と話す。すると、A児が「これこのまま置いといたらどうなるのかな?」と保育者に聞く。氷や水、土に興味をもっている子どもの姿を大切にしたいと考え、「じゃあこのまま置いておいてみる?」と提案した。

翌日、「どうなったかな?」と気持ちを弾ませながら容器をひっくり返してみると、下が氷、上が泥に分かれていた。「わあ!」「すごい、こんなふうになるん?」「分かれてるやん!」と話す。保育者は自分たちの発見に自信をもってほしいと思い、「ほんとだ、すごい!おもしろい発見だね」と共感し、また「なんでこうなったんだろうね」と、理由を考えられるように質問をした。するとA児は「水と砂やからや」B児は「分かった!泥って重くて下にいくからちゃう?」と話した。

<反省・評価>

- ・翌日の気温を見て機会を逃さず環境を用意したことで、氷の経験をすることができた。
- ・氷や水、土などに興味をもっている子どもの姿を見守り、置いておきたいという子どもの気持ちを受け止めたことで、継続して観察する姿に繋がった。
- ・子どもの発見を大いに認め、さらに性質について問いかけることで、より考える姿に繋がった

5. 研究の成果

- 幼児一人一人の遊びの姿から子どもの気持ちに寄り添い、環境を見直したり、遊びの環境構成の再構成をしたりしてきた。また、季節や適切な時期・タイミングよく環境を整え工夫や援助をすることで幼児は、試行錯誤を繰り返しながら豊かな経験ができたと考える。
- 遊びの中で幼児が、自ら考え工夫できるような環境構成に努めたことで、自分たちで考え、遊びをもっと楽しいものにしたという意欲に繋がった。また、友達存在に気づき遊びのイメージを膨らませ一緒に遊ぶ楽しさを味わうことで、意欲的に活動する姿につながった。

6. 今後の課題

- 今後も幼児が多様な環境と出会いかわる中で、感動体験を積み重ねていけるように保育内容の充実を図るとともに環境構成の工夫に努め保育者の援助のあり方を探っていく。また、豊かな体験を通し、幼・小・家庭・地域との連携を密にし、たくましく生活する幼児の育成をめざしたい。